

兵法・戦略を考える。

孫子

はじめに

組織にせよ個人にせよ、それらの主体が自分以外の主体と交流を行わなければいけない環境に身を置いており、且つその環境では生存してゆくための資源が有限である場合、主体間での「競争」という事態を避けることは難しい。そこで各主体は、何らかの手法・方法論に則り、競争相手を出し抜いたり、これを排除・打倒するといった「勝利」を目指すことになる。ただその目的を達成するための手法や方法論としては、その都度考え出すものもないわけではないが、大抵は自身の過去の経験、更には先人の知恵が採用される。というのも、現実の競争というものは多くの要素が複雑に絡み合っており、合理的な演算によって（多分に主観的で不明瞭な）勝利に繋がる手段を逆算することは困難なため、結果的に経験則的な手法・方法論に頼らざるを得ないからだ。

こういった経験則的な手法・方法論は、処世術、更には兵法・戦術・戦略などとも呼ばれ、洋の東西を問わず多数のものが存在する。それらの中でも、とりわけ我が国において著名な

が中国の兵法家である孫子の手によるとされる兵法書、いわゆる「孫子」だろう。

この「孫子」が我が国は伝わったのは平安時代、当時の中国唐王朝に留学していた吉備真備がこれを学び、帰国後広めたとされる。「続日本紀」によれば天平宝字8年（764年）に起きた「惠美押勝（藤原仲麻呂）の乱」の際、真備は孫子の兵法を用いてこれをよく鎮圧したという。また後に右大臣となる大江匡房も孫子を学び、これを源義家に伝えたとされ、その義家は後三年の役（1083年—1087年）の際、「鳥が飛び立つのは伏兵が存在していることを示す」「鳥起者、伏也」（行軍篇第九（上））との教えを活かし伏兵を察知、これを破ったという。その後、室町、戦国時代には武家の台頭とともに大名らがその知識を継承している。とりわけ甲斐（山梨県）の戦国大名武田信玄が自軍の軍旗に「…其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、…」(軍争篇第七(三三))の文言を採用したことはつとに知られる。更に、後の江戸幕藩体制下では、孫子の知識は林羅山や山鹿素行、荻生徂徠ら、更に幕末には佐久間象山や吉田松陰らによって研究・継承され、民間への普

続きをご覧いただくには JMS 誌をご購入ください。

<https://jmsweb.jp/contact>